様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　２３年　５月　６日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：　基盤研究（C）
研究期間：　2008～2012
課題番号：　２０５２０３７４
研究課題名（和文）　ラオ語におけるいわゆる補助動詞の認知言語学的視点からの研究

研究課題名（英文）　A Epistemiic Study of so-called subsidiary のりのりの verbs in Lao

研究代表者
鈴木　玲子（SUZUKI REIKO）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：　４０２８２７７７

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学 3001
キーワード：言語学・外国語・ラオ語・認知言語学・動詞連続・ラオス

１．研究計画の概要

本研究の目的は、言語資料として蓄積が不十分なラオ語のデータベースを構築し、そのデータを利用して、本来「動詞」であるが、「動詞連続」形の中において「補助動詞的」に使われる語について、認知言語学的な視点から検討するものである。

(1)研究の学術的背景

ラオ語は、近隣諸国の主要言語と比べて研究者も少なく、研究資料及び環境ともに充実していない。近年、さまざまな言語で本格的で大規模な資料のデータベース化が行われ、言語コーパス構築という形で認識され始めた分野においてもラオ語に関しては、国内外においてまだ言語研究に利用できる規模の言語コーパスは存在せず、ごく小規模で散在している限りである。

(2)ラオ語における「動詞連続」

ラオ語をはじめ東南アジアの諸言語の研究において、動詞をめぐる諸問題、とりわけ「動詞連続」は研究者にとって最も興味深い文法現象の一つである。その分析なくしてはこれら諸言語の理解はありえない。従来の研究では、個々の語についての「動詞連続」形についてはいくつか報告されているものの、一つの共通した「形」を網羅的に体系的に研究したものはない。

(3)研究内容

本研究期間は 4 年間であり、まず、ラオ語の研究環境を整えるべく、ラオ語文献および話し言葉のデータベース化を図る。ラオ語の研究はいまだ端緒についたばかりであり、その言語学的特徴を明らかにするためにも早急なデータベースの構築とそれを利用したラオ語研究が急務であると考える。したがって具体的資料のデータベース化と並行してそれを利用して認知言語学という比較的新しい言語学的視点からラオ語の特徴を記述しようと試みる。なかでも東南アジア大陸部の諸言語の大きな研究課題である「動詞連続」の一つである補助動詞に関して、体系的な検討を行うことを目的とする。

２．研究の進捗状況

本研究は、ラオスでの資料収集のための調査、そしてそれによって得られた資料による国内での研究の遂行、という内容で研究を進めていった。以下、年度ごとに「①海外調査」「②国内での研究」に分けて進捗状況を述べる。

(1)平成 20 年度

①ラオスでの調査協力要請と資料収集のための海外調査を行った。具体的には、データベースの資料選定のため、ラオスでよく読まれている書籍などを調査した。同時に、資料収集にあたっての協力要請や効率的な進め方などについて、ラオス言語学者と協議した。

②①で得られたラオス文学作品の中から数冊を選定し、入力作業、および内容の意味確認を行った。入力したデータをもとに、補助動詞と考えられる「khun」と「long」に着眼し、主動詞との意味関係を中心に検討した。

(2)平成 21 年度

①ラオス文学作品のデータベース化の正式な許可をラオス側から得る一方で、話し言葉収集については、ラオス映画のスクリプトなどを入手した。

②昨年度現地調査によって得られた資料のうち、まだ未入力のものを電算化した。一方で「khun」と「long」について前年度の論考に修正加筆を加えた。その後、新たにアス

ペクトマーカーと考えられている「si?」に着眼し、認知言語学的視点からの検討を試みた。

(3)平成 22 年度

①ラオスに比較的長期に滞在し、ラオス側の協力機関であるラオス国立大学でラオ語の資料収集および入力作業を行った。特に今回は現地長期滞在によって、より効率よく自然な形で収集できる話し言葉の収集に努めた。また新たな試みとして、ラオス語研究者と文献講読会や過去２年間に収集できた資料を使用したラオ語についての研究会をラオスで設け、国内外の研究者と意見交換を行った。

②前年度までに蓄積されたコーパス資料を使用してアスペクト辞の一つである「si?」について引き続き検討を行い、「第３回　国際ラオス学会」でその成果の一部を発表した。また、前年度までに入手した小説および話し言葉資料の入力作業を行った。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

詳細を以下に述べる。

まず、ラオ語のデータベース化としてラオス現代長編および短編小説や概説書、および劇やドラマのシナリオなどの入力を終え、それぞれについて、ラオス人でも判別が困難とされる文切り作業を終えている。

一方で、それらを利用して、実際に動詞連続形において、補助動詞的であると考えられる「khun」「long」について検討した。さらには補助動詞とは必ずしも言えないが、動詞連続形でよく使用されるアスペクト辞「si?」について検討した。その成果は論文や学会での発表という形で公開している。ただし、いずれも認知言語学的視点が十分であるとは言い難い点、さらにはラオ語動詞連続形での補助動詞的な語についての体系的な記述は今後に課された課題である。

４．今後の研究の推進方策

最終年度である平成 23 年度においては、まず前年度新たに入手した資料を早急に電算化した後、初年度からの全てのデータを整理しなおす。そして、データベースをどのような形で公開できるのかを各専門家に相談しながら実現に向けて具体的な作業を行う。

また補助動詞の検討については、前年度を引き継ぎ、補助動詞的な語についての認知言語学的な視点からの記述を試みる。

そして最終的には報告書と報告会ができるように具体的な手配などをする。当初はラオスから研究者を日本へ招聘して行う予定であったが、現時点では地震と原発の影響で来日を希望しないことから、これら二点について、ラオス側の研究協力機関であるラオス国立大学において研究成果報告会を行うことを考えている。また、9 月タイで行われる「東南アジア言語学シンポジウム」でもその成果を報告することにしたい。

最後に最終報告書を作成する。報告書は国内外の関係研究機関、研究者に送付する。なかでもラオスをはじめとする海外研究機関への成果還元を精力的に行う。

５．　代表的な研究成果

〔雑誌論文〕（計 3 件）

1) 鈴木 玲子「ラオス語教育における発音指導要領の紹介」外国語教育研究、査読無、13 巻、2010 年、pp. 122-129.

2) 鈴木 玲子「Serial verbs in Lao」Journal of Vientiane 450 years Anniversary of National University of Laos、査読有、2010 年、pp. 49-58.

3) 鈴木 玲子「ラオ語の‘khun’と‘long’について」東南アジア学（査読有）、第 14 巻, 2009 年、pp. 123-139.

〔学会発表〕（計　4 件）

1) 鈴木 玲子、「A Study of ‘si?’ in Lao」The Third International Conference on Lao Studies, (2010.7.15, Khonkaen University).

2) 鈴木 玲子「ラオ語の方向動詞について～khun（上がる）と long（下がる）を中心に～」、語学研究所定例研究会（2009 年 7 月 22 日、東京外国語大学）

3) 鈴木 玲子「ラオ語の動詞について」東南アジア諸言語研究会(2009 年 10 月 31 日;2010 年１月９日、東京外国語大学)

4) 鈴木 玲子「ラオス語教育における発音指導要領の紹介」外国語教育学会シンポジウム（2010 年３月９日、東京外国語大学）

〔図書〕（計　3 件）

1) 鈴木 玲子、白水社「ニューエクスプレスラオス語」2010 年、総ページ数 156。

2) 鈴木 玲子（編著者）、明石書店「ラオスを知るための 60 章」2010 年、総ページ数 358。

3) 鈴木 玲子、東京外国語大学出版部「ラオス語初級教本」2010 年、総ページ数 125。